

私たちが通う函館市立中島小学校の校歌の始めに「史にもしるき陣屋跡」という歌詞があります。みなさんは、この歌詞の意味を知っていますか？「史にもしるき」とは、「歴史にも記されている」という意味で、「陣屋」とは、戦いのときに敵の攻撃を防ぐために造られた基地のことを言います。

中島小学校のあたりには、江戸時代の終わり頃に「千代ヶ岡陣屋（ちよがおかじんや）」がありました。「千代ヶ岡陣屋」は、それまで日本を治めていた徳川幕府（とくがわばくふ）に変わり日本を治めようとする新政府との戦いときに造られた基地です。

この「千代ヶ岡陣屋」で最後まで勇敢（ゆうかん）に戦い、その生涯を終えることとなった大変立派な人物がいます。その人は「中島三郎助（なかじまさぶろうのすけ）」という武士です。

1853年、浦賀（うらが：現在の神奈川県横須賀市）に、ペリーが率いるアメリカ合衆国の艦隊（かんたい）4隻（せき）が来航しました。当時の日本人は、初めて見る外国の船を「黒船」と呼び、大変驚きました。このときに浦賀奉行所（うらがぶぎょうしょ：浦賀を治める役所）の役人であった三郎助は、日本の使者として艦隊に乗り込み、ペリーと堂々と話し合いをしたり、外国の頑丈な船の造り方などについてたくさん質問したりするなど、勇敢な姿をみせました。

1855年、三郎助は、日本にもペリーの艦隊のような船が多く必要となると考え、徳川幕府が開設した長崎海軍伝習所（ながさきかいぐんでんしゅうしょ：現在の海上自衛隊のような機関）に入り、日本で一番の砲手（ほうしゅ）と呼ばれるほど海軍術を深く学びました。また三郎助は、和歌、俳句、英語や他の外国語もよく学ぶなど、古いことから新しいことまで様々なことを熱心に勉強しました。

1868年、三郎助は、新政府の国づくりに反対し、「将来のために平和な国を築きたい。世界と肩を並べる国にするためには、蝦夷地（えぞち：現在の北海道）に理想の国をつくるしかない。」と考えた榎本武揚（えのもとたけあき）らとともに新政府と戦うために、箱館（現在の函館市）に渡り、五稜郭を基地として激しい戦いを繰り広げました。

1869年、新政府軍が箱館に総攻撃を開始すると、榎本武揚は、最前線の「千代ヶ岡陣屋」付近で勇敢に戦っていた三郎助と2人の子どもたちが、このままでは命を落とす危険があると考え、五稜郭に戻ってくるよう命令しました。ですが、三郎助と2人の子どもたちは、自分たちの信念を守り通すために、その命令を断り、最後まで「千代ヶ岡陣屋」で戦い続けました。

残念なことに三郎助は、その戦いに敗れ、2人の子どもたちとともに壮絶な最期をむかえることとなりました。

このように自分の信念を大切に命をなげうってまで戦い抜いた三郎助の強い気持ちや、様々なことに興味をもち、進んで学んでいく勉強熱心な姿勢は、味方の人だけではなく、多くの敵軍の人からも尊敬され、後世まで語り継がれていきました。

1931年、この町に住む人たちは、自分たちの町の名前を決めるときに、この地で勇敢に戦った中島三郎助の名前を由来としてこの土地を「中島町」と名付けることとしました。

1933年、中島町に多くの人々が住むようになり、北海道で一番の校舎と言われた校舎が造られ、学校の名前を決めるときに、この土地の名と「中島三郎助」の名前を由来として「中島小学校」と名付けることとしました。

私たちが通う函館市立中島小学校には、三郎助の勇敢な姿勢や勉学に熱心励む姿勢が願いとして込められているのでしょうか。